怪談街伽藍

二

特へ遠13
1458
2

怪談古伽童巻二

八子代稲荷霊験の事

子となるもの父子不如とこゝ迄に彼しれりのうきさまふ
ぶくもわ〳〵とたりよハ子ぶ孫るんよくゝだるなる
へ〳〵孫の図市原郡とやふ恵をまといへる土民あり
家富栄へ孫こふ久し祀りのして有りれば人る勢く
かゝづさり一子恵右衛門拝義よさとく行ゆる愛明
なりしの生ゆ猟と好こ却のゝ農業のいと毎こ山望へ
おくる獣とゑて二ゆ〳〵くもゞ父恵をまを親き為
きりのなれハ後世のゝ打るハぬハ狩かゝ恵の命と

断ときは必その身に報ふて地獄に堕ると教と
禁しめなれば此理をよく弁まへさとりて決う教生
ふひ出れと云こ是ひともんなるこうり公儀へうく
おかあさんと仏ようく文なかりもうもとれハ殺絶小ち
おりてげおぬれば悪をせ是をうつ一家中家おなじく
をくより書と送へ書て公姫に教生剃心のものと
ちんく いひつくめ獄と止こをる親の意をでおこと
をもて此姫鄙こハ移らしき世をてゆうれ世をしく英国も
仏も新に海をる花の蕾に悪をあるも絶めて世ひをれハ
聖仏の示しをも地をしめてゆうれもつ海しう教り

うつて二とセ計ゲ行こ男子をとりつけ悪ををと名付
寵愛しをれハまこざるくこうり多くて今ハ一向獄ものとおもど
父母ハ苦行ありて石仏ものもも信仰く行ものもあと
をもび悪をを更も猥乱しく悪をこ世こ教れべ仏教業
大ものに勤むるこて益ハ父の財よりも田畑も多くなりね
御るこ此悪をこ濫商こるなり能こ義こてをを小をと
ふをこ悪業者ありて家業ものこても己ゲいとることびな
さて嗔恚と出てハ人より先人をりかおもの身ひとて
理非と分さを肩と有る女のものこても大ぜあるこ罵り
人とゆをりて金銀米穀と称ごりれ英国絵小姫とび

親とさもぐくよとりて拾女よ雲〳〵せわるとわる悪りと
のこりを者わり女子ひとり拾りあとさくと呼ぶり付
嫁入文よりも紙ど美やさ〳〵奥形も人よりとくを繁敬
わりてえる人ごとよいろ〳〵ものり去るふ山さく父母に
孝源をもの又孝なり〳〵父ゲ人よ美る業とかとをふく
紙き山村ふ八ふ代稲荷ていとわ〳〵なる小社わるふ
日毎ふ歩ことをとそび父ゲ悪心と改てなんにな〻しめ
たひの人と丹波ふ二ふ行里名志の在こてわ〳〵んふ
祈も納更わりねべ〳〵えを来強欲ふ名の鷲神社よ
貴紙ふ七名り山さくとを立の拾女ふ（七年の間勤る

約束よ定め金子十両よ雲〳〵んといひ約〳〵百金持参
さくとふ人ふ来るもの川なりかくるも去〳〵でさくい
腰山といくらど差りわるきて葉つこ〳〵あく〳〵新ろ
身を忘て朝夕のたつぎと毎りろたよいるこね附し
秋の末こ山よ菌の蜜ふきびとんと行〳〵んこそかろ
行ふ〳〵藤の根を引ふ久〳〵しうやり〳〵心粉ふ〳〵ひ
付て出〳〵り去るふ大なる狐とえたけ行れんこ拾ひ
立て玉茶仕りけ〳〵絶ふ火縄付つけ火ぐさ切く
こ〳〵〳〵きびわ〳〵きびくまごこ〳〵りゆ〳〵りとこれ
去く差見れい狐よ拾はわ〳〵でるの〳〵や鷲義ゲ婚の

さくこうよりき女の肩先より鎌迫ふ背とうけて面と
手迎えれバなどうもたゞ〳〵もこんうゝがゝよ伏く
さんたゞよ死〳〵せどろるしむさぬたゞ〳〵へんうこ熱ゝい
きゝ魂も失せて〳〵きゝたゞ〳〵ゝのを見へざりしゞう
やゝくふさくといぐき抱ゝ耳口と
岩大勢めげて呼れバさくゝ目とひゝき熱ゝがゝ
敵を手ゝんて抱とバさゝゝよ抱いゝど熱ゝもせんて
なくたゞ抱て居るのゝうて業ゝくんゝも抱合さど
氣はうゝて多負〳〵伏よゝて時とうゝしぬ社の
日ハ伊の言安く日も山合よ入なんゝもるゝゝさく

ゝて徳ゞ世ゝ山も心ゝ〳〵わゝこゝゝたゝゝ熱ゝがゝるす
とゝゝゝで岩やゝ山の道ゝ居る中ゝんゝ〳〵ゝゝ
しゞがゝるゝふ人氣をゝつけゝゝり来ゝ山体をゝく
大きふ世ゝゝきゝゝゝゝいゝゝゝ〳〵狩衣のごゝく立てゝん
ねてゝゝるひゝゝ〳〵ゞゝて熱ゝゝが宿ゝゝゝり山
ゝと告ゝれバ家日のゝのゝのためゝてさいき上と下へゝと
ゝゝゝけ来る山ゝゝを赤の者ゝ父の鎧ゝ義ゝゝけ
つけ山ゝ人とゝゝゝゝ

むひいしゐかいをかいてもうくゝぬうり云ゆがうあぐき
ゆ沢なるさ沙弟五歳のゐん庵さろーへてゝて行く
さりなぐらけたるぬ藤治こと肝要やれ重夏
とうをくり医師ふをんをあんやゝいい鶴義も
げふとてあゝゝとれしせさゝとうきのをてかゝ
医業をとつくせぐうひなく壁の日丼ゝや十六の
義とらゝゝね恵左文とゝ始恵左ろ一家ゆりあ井ゑ
いうゝいせんとめんで炊ひ面きんをなく昔くひそゝ
居ゝり日ひさもあきゝとゝをゝ移ぐけるおとて
なをハ解死人のうゝよいうるゆとやいうんゝゝい

ゆまね元来鶴義丈ぬぐ紡きいいんも文ゝ二七日の
いゝるゝも果て十日余りふなんど鶴義ゆうり何の
ゆもいひこぐをふゆめをうゝなもくもひわに七ゝ
日もるゆゝぐけゝてゝぐりあるも寿ゝ移ぐ恵左文めや
ゝゝ行ゆるゝんぬぐてゝゝと見もるとゝをゝむゝう
ゆ左ぐてく鶴義ゆ洋ゝ可ゝりゝれば文紋向ひわて
ぬぐゝりするゝ毎ゝ恵左文ハ案内ゝ内ゝ入て悔ゝるゝ
いい終りてゝゆお化の見ゝ異ゝり叶上ハ悔恵左ろ
解死人よゝれゝ人芝ハおなぐゝりおゝくの帛ゝひ料よ
ゝるゝとゝて金文十五おゝゝれば鶴義ゝ行

りのともいちぞうしゝが涙をながくとゞめなげゝ子と
云ふ事よいたんの涙ぬぐわんや他を我ホうたぐ一子
悲たつ及もはなの只一子なり男女のまろこ分上
の美福とのこなるのこと行ゆも前世の因縁やら
めと今もそのゆと書あるとうひこ他ら生る老数
育て夫目もんを二祝ゝ夫なりて行ゆもゆの程
ようおとけーとつくくるる交ゝ悪ん涙さまら
ゆ○ようこゝ祝ゝ夫立横死の悲育ゆ為ゝんもり
しゆ人祝ゝきゆなぐてらしの拍女所〳〵七年の為
勤をさせる約と定めたる金〳〵こゝふりの拍女や

あるゆくだく滅せ〳〵ばぐ子なぐらも彼が生るけげん
ざるんざゝと祈ゝめたんませゆひて生夫ゝ横死を
なるさしめゆるなるべゝとゝひ的らゝうゝいなふ
しゝ解死人の涙ゝ及んや又ゝ金ゝ志の程ゝ山く
云ゝゆゝ云ゝ夫我ホ多年さまゝの云て人の金銀
行ふようゝたゝとゝ云ゝ天罰一時よせゆり報ひ姫ゞ
身ゝ及びゝと云ゝ一紙半銭ゝ出ゝんふ
云とゝて夫夫只今ら為なる金とゝとゝ云ゝ
人ゝへゝゝ成ゝも恩かゝゝと疑ゝなぐく成果ゝ
姫ゞ後世の助ゝとなりやせんとゝふゝ他ゆ

なりと申てうりしてこの業を教度日げでんして
去ぐりくしていてりしぐゆくありて今此三昇悉
皆吾子の理と紙悟りのひしこゝにて実おようの
ムりえへゆるしのくさるとて世界さやぐ四つけき糸
ムの今をのうるまひいそ行五ぞやうるそきを和
滅のえかるべきうと伏物ゆうくさるとも山うく
なぐしゆ金をえ狗有て姫の仏若仏のたをけ
たなしてうぐるをへいそぐうて山ゆと一番いひ
きうせんとちんとちるとと引止山金へ行りくうそる
中結まぐ悟りの上を迷ひ有いそぐ結ゆうるんと

よえ家大欲ゆたの眼をかるりのさんぎくぶえりや迷ひの
紀ざしくも欲やせんちやくくいふうで教度す
いうんうなくけうくいとて結ゆりて一族へちうくのゆう
とうれど教度ゆるとゆうとゆて一度ひりのども山
るゆと出て一てびい収一変ひあゆきて感じうぐひかぐう
先宿くへゆりね更より鬱ゆ義い結ぐ様死を悪志の結
清く繋くくていさうとくうゆなく此とゆせ
人のりくめて分の罪とさんげし身と好よぐき
至最のゆうちなくめるくゆ有ゆ先結方とそうて悪
かへくとけんぐうれとゆんゆ人くうきぐゆんの実実

あるゝと感じ米穀壁菜或は残なくとめてこれを
蒔て来たれば此方より国くにうち書かりて人家につうるを書
又此ものと警策に告くえの西へかへして来ど後くい
ぬめ〻うち人もうつ時のやうに彼しめ〻くなりぬ色
已に彼のなりとぶでうし彼に人の中に人なり
人の中に人有りこれといつなるべしかく警策が
苦んになりて後彼に友こうしをうのめ〻れのの
大法なくこれうとうまを生まれ彼に人をめう
ため皆苦んにくなりしとやかくて月日もこと
彼りて他ぐ三回忌にあたりて恵たう警策に毒

くれとこいてこれ仏ものと恵たうあるいてこれを
一村のものを集て百万編をとこの人けるふ七八十
万に及ぶ法表のうちより人智きくれい
おさくこいうふといつ為なく入来り為の
ごとく度数へなをとべ集り居るものたり
うけし数をとして一度にこれいくひるまこれ
警策は更に数に更に差うくの彼別もなく只とう
なるのこうして為べいの人の為もなしやわりて
警策さくにいくに法孔してとでこれ三回忌
の仏ものとなせり行方にこの海にて来り

ぬるを他ていてはらふ山へもりんとて
かしよ男人一人まりこなるこそていさ
なひてはしるもなく大なる家居ふるしふ
うけてきかるも数多引て奥へわら
ゆるけつるとそしりてなこれぬ目ふんふ
くるるんといひしふ今ちがとわるあへ一日
わうと立てそふ三日ふ成しとれりひしれ
三ゝせと有けるものいぶうさまゝもの分も
有つるゆとまてあやむしるゆ沉かしちるふ
その表彝義文級恵ちつ親子同義とんる

こそいてゝかれなれ衣冠正しき中老の人ま
ゝ人のひてまれれ山色のりのなるが海が岸の
他天性孝心深く海ゥ彩と歎きこゝせが乃
一日もけづひなくあゆゝとゝびまれと彩む
丹波不二家と戴意し彼が天性の横雑を
てんぜしめて志づくの内彼と世よあきりのと
なりて笑と深きあゝこよ天教とうけとり
久しあゝるなりけ方よ海ゥ熱気の業果
をもゝひのぞれて苦んゝなるいゆゝく
私のゆふあゝ牡山ふと彩くちんとのふ

法華耳よひどき美さめてもいとかうばしき香
の都よりうんじくるとうやはのれハ美さんてる
りのどとゝさるをとゝ法りを合ひ伝ふろうして
やまびそれよりをるををとのりの花の仏へて
仏法仏へ糸法引も切ゝびとゝ出家ををを
日うどさくを嫁ゝんといい入るりの教ちれど
さんどもさくい嫁とるゝいさうもなくて明
著仏理とのうんを入禅家の光徳を師と教
禅学をしつゝ廿七ゝて尼となり一生不
犯の禅尼となりて仏法国ふゝてさ名と

地義尼とうやいひてやんゝるき法ゝ入もられて
法侍なとしるるり変ゝてち法ある家基
しいとめてゝき牧りをなんゝるくゝや
佐渡漳ふたゝ海賊の雅とのごるゝり
たいちまゝぐゝめんゝ金剛ぶん一月と
日ろてわゝんのさゝとわゝいをとせぞろて
二王とせゝゝまゝぐんとくだくゝのゝとを
天文の末弘治の先よやわりゝん寛よ法湯
東復ちこ寺寺よりの紀地寺復の国よ有
ゝるとゝ神護山万寿ゝ神護山国ゝるゝ山あちより

年毎よりこれを納し大友家の老中より
年貢運送の船奉行とおもて人年毎より物登せ
ありしを吉岡宗歓入道の島崎ふ佐渡浦なる
といふりの船をもりて十六こんのうの〇ふ
年貢とつを海上とを登りしよ船中よりて意
俗ありり四国路よりつきたるよ備前岡山分浦よりて
塩浦七浦の海賊どもは船を奪ひ取んと計り
賊船多く打俗ひ佐渡ゞ船を見かけて矢とを
射るまこと雨のふるごとく佐渡ハ元来弦
弓の達人なれハ物つめ引佐わさんくよ射

たつる船ゆりてよとたるりの七八人ほどに時よ
射倒さるされた海賊ども多勢なれども
せとお後たたんよ能よを手うけく服よあや
ふくんくなれハ佐渡ふのりの傾果皆弓を
手捨たかうさなとりて切掛へども多勢な
まこと力なれる縅服よ要ふるるなくこんくる
如よ今と船中よりの先ほどと大の法師能謡
たぐりのもこんどおもしきはして古率
を押のけたぐ一人とこれ十六ほの帆柱を
ひつさげ船ふく振まわり海賊ゞ打し給

をとこどもく打ちより船の舳の矢をとりてくく切捨て海賊ども是をみて船をさまいとの撓だてうるを只討たれとこそ思る法師帆柱をとるを我の後とつき破れば其の船の海賊勿論ゆるしゆるおびをして海底の澤とぞ成る海賊ども是をみて振ひ引のきてゆゆるたくしひ給りてうの法師の姿勿論人うせて人へぐりしく和中の人こ奇異の心ひとなし是仏神の我をとらひをとらひてこそ捨び給へく東福寺へ送り納め奉る法師

勇力をふるひて必死の命をまぬかれしせこ事ふるみて物語しそれ一山の流大よ非ごろきなれ不審なれ山法師たちの二王は一夜の間よ矢をもく射立あり〜とその矢を抜るふ憤怒塩分の行基〜ちるをりとらて仏義ゆんるいと流〜和へ射込てる矢とれ和〜ゆんるふ遠ふ不もなく〜和ハ新〜ふとこ留ゆく二王の軍よおのひ我とくいふみごさよりとて法人奇矣の心ひとなりそれハ是よりしてそのころ京く波海よ慈くりの

二尊の二王の利とうけてかれやしとうや
そもそも二王の化と[illegible]と昭金剛部の
大日如来なりとうや寵と密蔵[illegible]と
かれと分陀羅尼の塵と交りのふ云ふより
法縁利益のひろと一天と耀て消滅三毒の
炬と四海と深ハしめ夜叉鬼畜の孔とかし
悲悲[illegible]伏欲の法と示しまふ口と[illegible]
密ハ[illegible]字なふ生の[illegible]と[illegible]
形ハ吽の字ふ[illegible]得の相とのべ因ふ[illegible]
受の切と源しふ[illegible]縁の[illegible]生と[illegible]

威猛念怒の法と[illegible]
去ハ或時ハ佛つとち[illegible]て神力とふて[illegible]
三業と排ひ又或時ハ[illegible]を権衡して三[illegible]
の法欲と[illegible]
二王の霊験ハ故業法[illegible]
けるとうや。

なを庵摺川童のう

末ひろさ名のみ[illegible]
庵ガハ谷ふもハ武蔵の[illegible]
不ありその迹ふ[illegible]

よきてもその名の標深なれば賞みたわまと
わりて家内も賑ぐく住居りて又月毎にれて
川あも清汐なりてれに行水も同し女の
仕業をその夜のあつと浴ひて下女共どもきふ
おなる川へ持り清めるゐいて急くてもも
なくぞつれそれぐらの石ようしけうみ
ちげ中をを居るよいやき世行よいる
あのくもいわるとうやうて移り氣さし
ろくくとうこぎるよ行うにちどえと
引なり出ぐろきさめてんをべ八ツ半ある

童の就へ改髪とりみたれべようもんぞよい
ゆをれが是とつくくてるゆ分生身あ水
いうり居て引こうきや川へ蔵入めぐうんをよ
やくんわてそのもとりて引うんとうん
文よ是とくるさぞてこうくいちろいて中くよ
是とくなりて行うんちとゆぞけぐうて近
わぐりれい彼童も日はしくあ中ようおて
近来よ遠是とおして近ろよ中くよの
家人元至入庭安へうるくその女い浪入ろれ
ね家内の上下屋敷とをめ居ろりしぐ

ちをとゝんてこゝいうよりくいづんもゆどろき
さゝぎろるよ門を今をうゝきて一てきのゝん
めりもなりりくよたちまちあとかしこうる
ごくゝゝくゝびきさゝゝゝたまる後りり屋ふ居
なるりのどゝいこゝれよゝゝゝよゝ葉よゝあ
よゝ嵯生るゝゝりくゝゝゝゝてゝ女ゝあゝりゝ
びゝくゝゝゝゝゝ伏せて後ゝゝ生ゝりゝ
ゝゝりゝゝゝゝと回よゝのゝてゝもゝりゝ
伏ゝゝゝゝまで追ゝけゝりゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝまて追ゝりて川ゝゝけゝゝゝゝゝ
ゝゝ附改のゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝんなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

怪談古伽羅巻之二終